

2020. 1. 17

畑 啓之

魚粉の価格高騰で養殖漁業に痛手 ペルーがカタクチイワシ（アンチョビ）を禁漁に

ペルーがカタクチイワシ漁を資源保存の目的から禁漁とした。そのため、カタクチイワシより製造される魚粉の価格が高騰している。そればかりか、日本へのその魚粉の輸入量が減少しているとのニュースである。魚粉は魚養殖の飼料である。

本日の日本経済新聞によると、マグロを1キロ大きくするのに15キロのイワシやサバなどが必要とある。さらに、養殖コストの6~7割がエサ代であると。この記事からすると、養殖マグロの価格が高騰することは必至である。

一昨日のブログにおいて、右の表を示した。マグロを育てるには、牛肉を生産するのと同じくらいの飼料が必要なのようである。

畜産物を1kg生産するのに必要な餌の穀物の量 (トウモロコシの必要量)	・1000平方メートル(1反)から得られるタンパク質量
11kg 牛肉	39.9kg 大豆
7kg 豚肉	29.7kg 米
4kg 鶏肉	23.7kg トウモロコシ
3kg 鶏卵	15.5kg 小麦
2kg 魚肉	5.0kg ほかの肉類
	2.2kg 牛肉

従って、マグロをあきらめてイワシやサバで辛抱すればよ

り多くの人口を養えるようになることは確かである。文明が進歩すると美食家が増えるというのは歴史の真理かもしれないが、エコの観点からは加工度の低い食品をおいしくいただく努力をすることが王道であろう。

なお、カタクチイワシはもう50年以上前の小学校か中学校の授業で、「ペルーからのアンチョビ、肥料」となった覚えがある。昔は田畑にすき込んで肥料として用いていた。それが今では魚の餌に変身した。

カタクチイワシ科 (Wikipedia)

ニシン目に属する科の一つ。総称的にアンチョビ(英語 anchovy)と呼ばれる。イタリア語でアッチューガ acciuga (複数形はアッチューゲ acciughe)、フランス語でアンシヨワ anchois。日本では特に塩蔵品にした食品を指すことが多い。

食用以外に肥料や飼料としても使用され、粉状に加工したものは魚粉やフィッシュミールとよばれる。煮干しや魚醤も生のアンチョビを使って作られることがある。

魚粉 2年ぶり高値

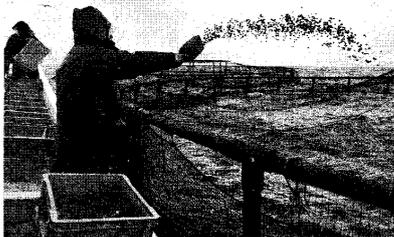
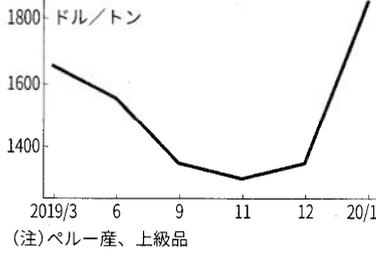
養殖向けエサ ペルーの禁漁で

ブリやウナギなど養殖魚のエサに使う魚粉の国際相場が急騰している。昨年10月上旬から3カ月で4割上昇し、2年ぶりの高値圏にある。魚粉の主原料であるカタクチイワシの世界最大の産地、ペルーが資源保護のために1月から突如禁漁にしたためだ。日本では東京五輪を前に、例年より多くの魚が養殖されており、最需要期の夏に向けて供給不足も懸念される。

3カ月で4割上昇

「今季は出荷できませ」4割しか届かなくなっ
「先週から日本の商社」と、大手商社の担当者
社にペルーの魚粉各社が「者は困惑している。
ら異例の通知が届いている。ペルーは世界最大の魚
粉生産国だ。アジア向け

魚粉相場は2年ぶりの高値に



クロマグロやサーモンなどの養殖匹数は過去最多水準(青森県のサーモン養殖場)

供給の半分ほどを占める。質も良いとして、日本では養殖魚向けのエサ原料の多くを同国に頼る。漁期は4〜6月と12月〜翌年1月の年2回。本来なら漁獲が盛りのはずだが、異変が起きた。昨年12月の解禁以降、とれる魚が少なく、ペルー政府は資源保護のため今年1月1日から一時禁漁にしていたが、14日に今季の漁打ち切りを決めた。漁獲枠は280万トあったが、禁漁のまま今漁期が終了したため、約3分の1の100万トしか確保できなかった。

五輪需要にらむ

世界の主要な魚粉産出国の原料魚の漁獲量は約800万ト(過去10年の平均)だが、2019年度はペルーの減産で720万トほどと、前年度より3割減の見通し。魚粉相場も高騰している。9月初旬には1トあたり1300ドルと8年ぶりの安値に下がる場面もあったが、現在は1850ドルと2年ぶりの高値圏になった。「どこまで上

がるのかまだわからない」(大手商社)
魚粉の世界最大の消費国、中国での品薄も相場を押し上げている。中国は輸入するだけでなく、自国でも年間約50万トを生産している。しかし昨年、アフリカ豚コレラの影響で養殖向けの飼料需要が減るとみて魚粉相場が下落した。魚粉原料の不漁と相場安で生産意欲が落ち込み、中国国内の魚粉生産量は2019年9〜12月は前年同期比4割減った。

ペルーの突然の禁漁を受け、日本の商社はアフリカ産など代替原料を急ぎよかき集めているが、次の漁が始まるのは4月。最需要期の初夏に向けて供給不足の懸念も出てきた。

魚粉価格は、養殖業者の経営を大きく左右する。マグロは1ト大きくするの15%のイワシやサバなどのエサが必要とされるなど、魚の養殖コストのうち6〜7割がエサ代だ。

下落見込み一転

漁業経営安定化推進協会(東京・千代田)によると、19年秋のエサ相場は1ト18万3千円前後。19年秋に中国の需要鈍化見通しで国際相場が下落した際は、20年春にも日本の飼料価格は2〜3割値下がりするとみられていた。ペルーの禁漁で一転、想定外の供給減となり「横ばいもしくはやや値上がり」(飼料会社)する可能性も出てきた。養殖業者はエサに大豆

デジタル大辞典

アンチヨビー (anchovy)

カタクチイワシ科の小さい海水魚。地中海・南アメリカ西岸などでとれる。また、それを塩漬け醃し、オリーブ油に漬けたもの。オードブルやペーストソースにする。

を配合するなど魚粉の割合を減らす取り組みをしているが「魚を健康でおいしく育てるには、やはり魚粉が欠かせない」(ブリ養殖業者)という。日本は水産業を成長産業にするため養殖を強化する戦略だが、燃油やエサ代高騰が生産者の経営の重荷となっている。